

第六章 生物

一 植物

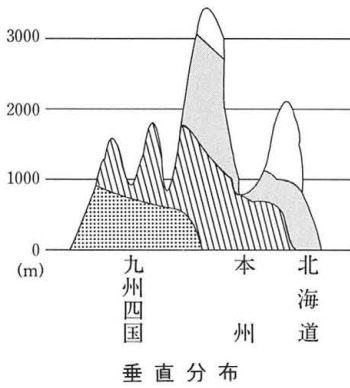
1 分布

本郡の植物垂直分布は、低地帯、すなわち常緑広葉樹帯から、亜高山帯、すなわち、針葉樹帯に及んでいる。水平分布では、暖帯から、温帯性のものが見られる。

低地帯のカシ、アカマツの群生、山地帯のカエデ、モミ、トチノキ、ナラ、ブナ、ウラジロモミ、イシヅチザサの混生、群生、更に石鎚では、シコクダケカンバ、シコクシラベの群生が見られる。

記号	区分	群落
	森林限界外地	木は育たない
	亜高山帯	ガツソ ツマビ メドシ コトシ
	山地帯	ナラ ナデノ ナ、エチ フカト
	温地帯	シイ シキマ シ、パ カック
	低地帯	

植物分布記号



垂直分布



水平分布

本町には、低地帯、すなわち、カシ、アカマツ群系から、山地帯、すなわち、ブナ群系までのものが分布している。
なかでも、三坂、皿ヶ嶺、菅生山、古岩屋、井内峠、白猪峠、イヨス山、桂ヶ森、サレガ峠などは、本町を代表する植物相をなしていて貴重存在といえる。

2 三坂

「三坂馬子唄」で哀愁をそそった三坂峠も、国道三三三号線の開通、その後の大改修工事の完成にともない、近代化の波が急テンポでおしよせ

モダンなドライブイン、展望台などの諸施設がつきつきにでき、昔日の面影は失われつつある。

この峠（七二〇）帯には、トサノミツバツツジ、ノリウツギ、ウラジロノキ、アブラチヤン、ウリハダカエデ、ハイノキ、アセビなど山地性の木が多い。なお、ここの絶壁では、珍しくもコウヤマキの自生を見ることができぬ。

湿地には、五月に、ハナショウブの原種、ノハナショウブの花が咲きほこるほか、トキノウ、ヌマトラノオ、ワレモコウ、オタカラコウ、サワヒヨドリ、サワオグルマ、ミズタビラコ、ゴウソ、ナルコスゲ、ミズギボウシなど、湿原性の草本が多く見られる。また、珍しいミズゴケの自生も見ることができぬ。



ノハナショウブ

九月になると、ひとときわ背の高い、ハンカイソウの黄色い花が咲き、印象的である。

無線中継所に至る路傍には、サワフタギ、ウグイスカグラ、ヤマヤナギ、コツクバネウツギ、ミネハハソなどの低木の類、また、その下草にはヒトリシズカ、ウツボグサ、ヒメユリ、モミジガサ、ホタルブクロ、ナツトウダイ、エビネ、アキノタムラソウ、ナベワリ、カキランなどの

ほか、六月の花のころには、山いっばいその芳香をただよわせるフクリンササユリ、晩秋になると、リンドウの花を多く見るし、珍しいタカネマンクサ、シュロソウの自生も見ることができぬ。なお、谷川ぞいの湿地には、イタドリ、フキ、ウド、原野にはワラビ、ゼンマイも多い。新緑のころにはこれらの山の幸を求めて歩く人影も多くなる。

3 皿ヶ嶺

六部堂からの登山道ぞいには、自生または植林されたマツ、スギ、ヒノキの林のほか、クマイチゴ、ヤマガキ、ヤマザクラ、ケヤキ、ケンポナシが多い。秋には見事に紅葉するヤマハゼなども多い。

また、秋には実をつけるイタドリ、ゲンノショウコ、キンミズヒキ、ヌズビトハギ、イノコヅチ、コメナモミもそこかしこで見かける。登るにつれて、ノブドウ、リンドウ、ツリガネニンジン、オトギリソウ、ミソハギ、ノコンギクなどを見かけるようになる。イネ科のなかまでは、カゼクサ、ネズミノオ、トダシバ、チカラシバ、キンエノコロ、ギンエノコロ、メカルカヤ、ススキが多く、秋にもなると、これらの植物は秋の風情を一段と加えてくれる。

山道の急な坂にかかるとクスギ、ナラ、クリ、イロハモミジ、アベマキ、リョウブなどが多くなるとともに、よく茂ったススキも見られるようになる。これらのススキの根元では、夏のころナンバンギセルの寄生を見ることができぬ。このススキにまじって、秋の七草のなかまであるヤマハギのほかウバユリ、ヤマシロギクも目に映る。腐生植物のギンリョウソウ、キョウキラン、オニノヤガラ、寄生植物のヒノキバヤドリギもある。

谷川近くの湿地には、チョウチンゴケ、ジャゴケの群生がある。

一二〇〇呎の頂上付近には、この山塊の主峰だけに自生植物の貴重な種類も多いが、なんといっても立ち並ぶブナ林はすばらしい。ブナは温帯の代表的植物である。

このブナ林は、植物分布を調べる重要な手がかりになるほか。皿ヶ嶺登山者にとって憧れの的でもある。樹下の岩の上、陰地にあるイワカガミ、イチヤクソウ、ヒトツボグロ、コバイモは珍しい。風穴周辺には、白花のコンロンソウ、ヤマシヤクヤク、バイケイソウ、エンレイソウやヤマブキノソウ、クマガイソウ、暗紫色のハシリドコロなど深山性の山草が多い。

竜神平には、ノヤナギ、細胞にたくさん水を貯えることのできるミズゴケ、それに、春、ピンクの花を咲かせ、秋には真紅の実をつけるオオズミがある。

ベニモンカラスジミの保護区には、コバノフウリンウメモドキ、ハコネウツギ、クロカンバ、サワグルミが見られる。また、シコクカッコ



ブナ林

ウソウ、モウセンゴケ、ミミカキグサ、シダ類には、カラクサシダ、オシヤクシダニダ、ヒメシダがある。エンコウカエデも

見のがせない。

キノコでは、ブナの枯木に毒を持つツキヨタケが生え、夜は青白く光る。秋のころは、山腹の雑木林の中で、シメジなどの食用キノコを見ることが出来る。

4 大除城址

大除城址の山の斜面には、淡黄色の花が咲くヒカゲツツジが群生している。五月初旬の花のころには、山の斜面が黄色く色どられて見事な景観を示す。

このあたりでは、この城址にヒカゲツツジが特别多いことから、人よんで、「直昌ツツジ」といい、「大除城の三代目城主直昌の生まれ変わりしもの」とのいい伝えがある。



ヒカゲツツジ

また、赤い実をつけるソヨゴ、コバノガマズミ、紫色の実をむすぶ、ヤブムラサキのほか、イヌツゲ、ミズキ、エゴノキ、ホウノキ、アキニレ、ハルニレ、ヌルデ、ケヤキ、ナラ、クリなどがある。特に、ここでは皮の厚いアツカワコナラが珍しい。山麓の湿地には、梅雨のころ黄色の花を咲かせるキスゲが多い。夕方開花するところから別名ユウスゲともいう。また、こ

の辺一帯には、ヒガンバナも多く、細長い芽の先端に赤いたいへんはでな花を車輪状に咲かせる。

5 名勝「菅生山」

菅生山大宝寺境内は、金山スギ、ヒノキを主とする大森林で、特に参道には、樹齢何百年にも及ぶ見事なスギが立ち並んでいる。

参道石垣のユキノシタの群生、オカメザサ、寺の下のマダケのほか、ススダケ、オモゴザサ、ネザサも見られる。

谷川沿いには、ガクウツギ、モミジガサ、カシワバハグマ、茎に毛があり、毒性の強いイラクサ、クスノキ科のクロモジノキ、ヤマコウバンヤブニッケイ、シロダモをはじめキブシ、カナクギノキ、エゴノキ、ニワトコ、アブラチャン、サワフタギ、エゾエノキなどが多い。

野草では、草たけ二階にも達するタケニグサからホソバヤノネグサ、ホドイモ、小植物には、ニシキソウ、マメ科ではタンキリマメ、ノササゲ、マキエハギが、谷にそって上ると、シャガの群生、クラマゴケ、ミズタバコ、ウワバミソウ、ツリフネソウなどもある。



シュロソウ

シダの類は、実に豊富で、子のうのつきかたに特色をもつイヌワラビ、ヤマイヌワラビ、大型のシダでは、葉がひし形のイワヘゴ、矢はず形のタニヘゴ、仮葉と実葉のあるイヌガンソク、これらのほか、ゼンマイ、ヤシヤゼンマイ、フモトシダ、シケチシダ、ホシダ、キジノオ、ゲジゲジシダ、シンガシラ、ヤブソテツ、ノキシノブ、ホソバシケンシダなどを見ることがができる。

寺の近くには、キツネノボタン、ケキツネボタン、アカソ、コアコンメヤブマオ、カラムシ、キクのなかまを思わせるシュウメイギク、木からまるアケビ、オオツヅラフジ、ミツバアケビ、クズも多い。

スギ、ヒノキ、ケヤキ、エノキ、エゾエノキの下草には珍しいアカノママ、グロテスクなマムシグサ、ヤマジノホトトギス、タマガワホトトギス、ヤマガシユウ、珍しいコ



フクリンササユリ

シヨウノキ、葉に光沢のあるミヤマフユイチゴ、黄色の花のハマカンギク、サワギク、コメナモミ、アキノキリンソウ、ヤブヘビイチゴ、ホソバリンドウ、コオトギリ、コフウロウ、実が衣服につきまとうヤブジラミ、ヌスビトハギ、下葉の大きいヤブハギ細長いコウヤボウキなどがある。ここから峠御堂へ出ると、葉の下部にシュロ状の毛の

あるシュロソウが自生している。

6 笛ヶ滝公園・三島神社ほか

池の堤では、タンポポ、ノビルなどのほか、ナンテンハギが多い。このナンテンハギは、松山方面では少ない。ここから、山の方へ登ると草原では、ヒヨドリバナ、オミナエシ、オトコエシ、ヒメユリ、コオニユリなどがあり、スギ、ヒノキの林へ入ると、ここでもウバユリ、フクリンササユリを多く見かける。

三島神社の社頭には、スギの老木がある。裏山にはメグスリノキ、ウシコロシ、ヘクソカズラなどずいぶんへんてこな名の植物のほか、ヤブコウジ、ナガバノキイチゴ、キズタ、ヒサカキ、ネズミモチ、ウワミズザクラ、カタクリなどがある。

日切から、久万川沿いに下ると、ネコヤナギ、ヨシの群生が目につく。落ち下ると、アカメガシワ、ネムノキ、カワラハンノキが目だつようになる。川沿いのキシツツジは特に美しい。



スダレヨシ

7 イヨス山

露峰のイヨス山（八七七崒）には、「宇和のイワシに伊代すだれ」とうたわれ、古来有名であり、一〇〇〇年の栽培史をもつスダレヨシの自生

地がある。枝分かれしないばかりか、節間が長いので、古来、製簾用として重宝がられていた。

この付近は、昭和六年故牧野富太郎博士が発見し命名したクマヤマグミが自生しているほか、ヒメユリ、リンドウなども多い。また、雑木林では、ヒカゲノカズラの群生、ミヤマシキミ、マツグミヤドリギも見える。

8 桂ヶ森

この山（二二四崒）の山麓一带には、旧藩時代から、水田へ入れる肥草の草刈り場として、原野のままのところが多かったが、近年になって、木炭の原木のクスギ、建築用材のスギ、ヒノキなどの植林が盛んになって、山の様相を変えてきている。

しかし、頂上近くでは、インヅチザサの群生も見られ、景観はすばらしい。

山麓の雑木林ではツルウメモドキ、ニシキギ、マユミ、ヒヨウタンボク、イヌガヤ、カヤ、モミ、クロモジ、ウシコロシ、イヌザンショウ、カラスザンショウ、アオハダ、ナツツバキ、アキグミ、ナワシログミ、ヒイラギ、スノキ、エゴノキ、ハリギリが多く、また、谷川沿いには、イヌエンジュ、アセビ、サルトリイバラ、ジャケツイバラ、ノイバラ、サワグルミ、アケビ、サワフタギ、クマイチゴ、ヤマフジ、クズ、ヤマハゼ、ヌルデ、キブシ、タラノキ、タニウツギなどが多い。

桂ヶ森から屋根づたいに正持ヶ峠シメツツに向かう途中にはセンブリ、瀬戸の奥には、ツクシシヤクナゲの群生があって、五月のころには、優美な花をつける。瀬戸から伊予郡へ出るサレガ峠では、イヨコザサの自生を

見ることが出来る。瀬戸から二名川にそって下ると、川岸にはオンツツジを多く見かけるほか、スギ、ヒノキの美林や、マダケ、モウソウチクなどの竹林も多く見かける。

9 井内峠・白猪峠

井内峠（二〇八八呎）には、クマガイソウ、トサノモミジガサ、ジガバチソウ、ハマカンギク、ヤマブキソウ、エビネ、六月のころ美しい姿を見せるノビネチドリなどがある。また、屋根づたいには、ツクシシヤクナゲが多く、花のころには、想像以上の美観を呈する。その他、フサザクラ、ホウノキ、ミズナラ、リョウブ、アワブキ、ナンキンナナカマドなどの広葉木のほか、モミ、ツガ、まれには、ゴヨウマツの自生も見られる。また、カエデの類も多いので、その紅葉も見事である。

白猪峠周辺には、ウチョウラン、ウメバチソウ、イワギリソウ、キツリフネ、ホテイシダ、ミヤマイタチシダ、クロタキカズラ、ハルトラノオ、ルリイチゲ、シコクカツコウソウなど珍しい植物が多い。

井内峠から直瀬へ出る道々には、イナモリソウ、ヤマジオウ、湿地にはモウセンゴケもあって、捕虫の様子もおもしろい。ここにもフクリンササユリが多く、花時には、香気が高く、山道の寂しさを忘れさせてくれる。

直瀬の駐場では、実に白い毛をつけるオキナグサのほか、アイバソウ、フナバラソウ、畑では、帰化植物のグンバイナズナが珍しい。

10 古岩屋・岩屋山

古岩屋と岩屋山の植物相は不可分の関係であるから、岩屋山の植物についても記することとする。

礫岩峰の岩壁には、イワヒバの群生、またセッコクなどの着生も見られるが、イワヤシダ、イヨクジャクをはじめとするシダ類の多いのが、この山の特色といえよう。

岩屋山には、スギ、ヒノキ、カシの大木のほか、トチノキの老木が多く、この木の花の咲くころはみごとである。これらの樹下には、リョウメンシダの大群生、谷ぞいの湿地には、クジャクシダ、イワヤシダの大群生、ヒカゲワラビ、ウスヒメワラビ、シラガシダなどが見られる。また、昨今、目だって減っているものに、イヨクジャクがある。

着生植物では、イワベンケイソウ、オシヤクシデンダ、シノブ、ヘラシダ、シンラン、カタヒバ、イワギリソウ、ベニカヤラン、ツリシユスラン、ヨウラクラン、ウチョウラン、マメヅタラン、カヤラン、ムギラン、トケンランなどが知られている。イワギリソウは小植物ながら、夏の花時には、筒状で淡紅色の愛らしい花をつける。



ウチョウラン



イワヤシダ

寺の上の方には、ヤブミョウガの群生のほか、イイギリも多い。また、下の川ぞいの小道のそばでは、ノシユンギク、マムシグサ、薬用のトチバニンジン、スズムシソウ、木本では、マタタビ、ヤブニッケイから、シロダモ、アオジクユズリハ、ユズリハ、ミズキ、ウラジロガンがあり、竹の類では、昔矢に使用されていたヤダケ、ススダケ、メダケ等が自生している。

植物分布の上から奇異な存在の植物として白山権現の岩峰に、キハギなどにとりかこまれた、ウバメガシの古株がある。ウバメガシは、普通暖地の海岸などで自生する植物であるから、ここ岩屋山にあることについての理由は、今のところじゅうぶん解明されていない。もし、自生のものであるならば、今の岩屋山はその昔、海岸であったかも知れない。

なお、この近くに、暖地で見えるアカガシの老木があったが、二十年前に、炭材になってしまったのでもう見る事ができない。

古岩屋の岩峰でも、たぐさんのイワヒバを見るほか、湿地に入ると、クジャクシダ、イワヤシダ、ヤブソテツ、イワガネゼンマイ、リョウメシダ、また着生のオシヤクシデンド、シノブなどに、ツリフネソウ、ナツトウダイ、木本の類では、ケンボナシ、メグスリの木、クロモジ、シロモジ、ホウノキ、トチノキ、カエデの類も多く、秋になると紅葉の名所となる。

ここから畑野川へ出る湿地には、ミズゴケのほか、日本でも北の方に多い、ヤマドリゼンマイがある。これは特に珍しいことである。

下畑野川へ出ると、住吉神社境内では、自生のものではないと思われるが、十数本のカヤの原木が目につく。

下畑野川から野尻へ出る林では、昭和六年、面河溪で発見命名のオモゴザサの自生が見られる。

11 帰化植物

本郡は、地理的要素といい、気象要素といい、一つの内陸といえる。この地域へ外国産の植物がはいって、あたかも、在来種のように広まっているものには、次のようなものがある。

ムラサキカタバミは、南米原産であるが、江戸時代に入って広がり、現在いたるところで見られる。

シロツメクサは欧州原産であるが、江戸時代に入って野生化したものである。この草はオランダイガガラスの器を箱詰めにするとき、その間隙をこの枯れ草でふさいでいたものである。

アカツメクサは、欧州原産で、明治初年に入って野生化したものである。

レンゲは、中国原産で、緑肥として栽培するようになって広まったものである。

ヒメムカシヨモギは、北米原産で、明治初年に入って鉄道の発達とともに広まっていった。

ヒメジオン、オオマツヨイグサは、北米原産で、明治年間にあって野生化したものである。



セイタカアワダチソウ

オオイヌノフグリ、タチイヌノフグリは、ともに欧州原産で、明治初年に入って野生化したものである。

このほか、コニシキソウ、ヒメコバンソウ、ノボロギク、ヒユ、アオビユ、ニワゼキショウ、アカバナ、ノボロギク、アメリカセンダングサ、シマニシキソウ、ヒメスイバ、グンバイナズナは、いずれも帰化したものである。

セイタカアワダチソウは、北米原産の多年草である。土手や荒地に群落をつくって育つ。近年、ヨモギ、ススキなどについて目立つようになつてきている。

二 動物

1 分布

本町の動物分布は、皿ヶ嶺の一部分を除いて、その差はほとんど見られない。したがって、主に町の代表的な地域に生息しているものを記すこととする。

2 昆虫類

自然環境が昆虫の生息に適しているため、昆虫の種類も非常に多い。

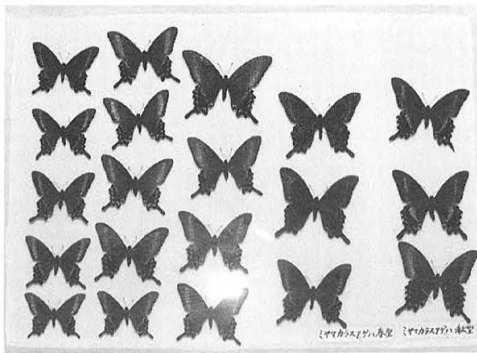
三坂峠(七二〇㊦) 近辺は、雑木林、原野などが多い関係で昆虫の多発生地になつている。特にクロシジミは、この地方にのみすんでいる珍しいチョウなのである。このチョウは、幼虫時代をクロオオアリの巣の中で過ごす。これは、クロシジミの幼虫が出す汁をクロオオアリがなめ、クロオオアリはクロシジミにえさを与えるしくみ、すなわち、共生生活

を営むためである。クロシジミのすんでいる雑木林のクスギには、オオケバカアブラムシがいる。

イボタの木を食草とするウラゴマダランジミも多く、雑木林一帯には、夏のころ、アカシジミ、ミズイロオナガシジミ、オオミドリシジミ、サツマジミ、オオムラサキ、ゴマダラチョウ、コムラサキ、インガケチョウ、アオスジアゲハ、ルリタテハ、アカタテハ、クロヒカゲモドキ、キマダラヒカゲ、コジャノメ、ツマグロヒョウモンなど多くのチョウが見られる。

夏の終わりのころになると、タテハチョウ、ジャノメチョウの類が多くなる。

湿地の草原には、オオウラギンスジヒョウモン、ウラギンヒョウモン、ウラギンスジヒョウモンのような草地を好むチョウが多い。

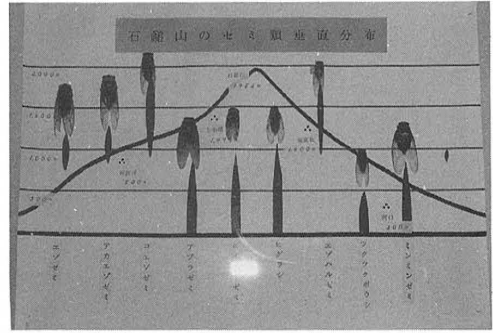


チ ヨ ウ (標本の写真)

水源地あたりまで下ると、アサギマダラ、アゲハチョウの類、甲虫類、ミツバチ、ハナバチの活動がよく目につるようになる。

スギ、ヒノキの林では、ヒグラシ、ツクツクボウシ、ニイニイゼミ、ミンミンゼミ、アブラゼミの鳴き声もにぎやかである。

甲虫の類では、ミヤマクワガタ、ノコギリクワガタ、コクワガタ、カブトムシ、カナブン、シロテン



セ ミ (標本の写真)

ハナムグリやカミキリムシ、コムツキムシ、ゾウムシ類がすんでいて、三坂峠付近では、南北両系の昆虫が混生する昆虫相をなしている。

皿ヶ嶺の竜神平付近の雑木林には、世界でここだけにしか生息していないといわれるベニモンカラスジジミがいる。このチョウは、

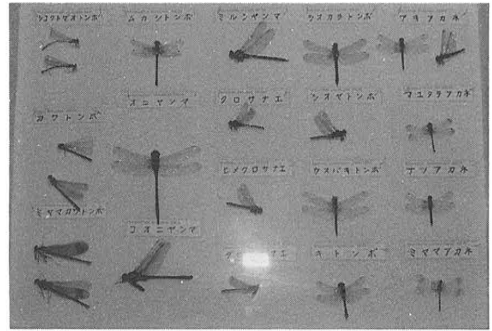
昭和三十一年、県立博物館の太田喬三・楠博幸が発見し、その後、根

気強い研究を積み重ねた結果、その生態をつきとめた。

ベニモンカラスジジミの、卵からかえった幼虫はコバノウメモドキの葉をたべて成長し、七月ごろ親になり、ウツギ、ミヤマシグレなどの蜜をあさって生活する。このベニモンカラスジジミは、昭和三十七年県指定の天然記念物となり生息地の林とともに保護され、現在に至っている。

このほか、一〇〇呎以上の林には北方系のフジミドリシジミ、アイミドリシジミ、エゾミドリシジミ、キバネセセリ、ツマジロウラジャノメなどの珍しいものもある。

頂上近くでは、山頂を占有する習性のあるミヤマカラスアゲハ、カラアゲハ、キアゲハ、南方系のモンキアゲハ、ツマグロヒヨモンなどの活動が見られ、面白い。そのほか、山頂及び尾根づたいでは、上昇気流に乗って来る数多い昆虫をみることができる。



ト ン ボ (標本の写真)

六月下旬から七月上旬になると、三坂や山麓で発生したオオミドリシジミも山頂に集まるようになる。竜神平の草原では、ハンカイソウなどの花にヒヨウモンチョウの仲間などが群がるのも見られる。

甲虫の類では、アカジマトラカミキリ、ヨコヤマヒゲナガカミキリ、マダラクワガタ、ヒメオオクワガタ、アオアシナガハナムグリなどの北方系のもののほか、ヒメ

オサムシ、オオオサムシ、時には、イガブチヒゲハナカミキリ、スネケワガタ、アオアシナガハナムグリ、シコクオオヒラタハナムグリも見られる。朽木には、ベニヒラタムシ、マダラクワガタ、キノコにくるカタボシオオキノコムシなどいろいろなものがある。

ブナ林では、夏のころ、エゾゼミ、コエゾゼミが、山腹の林ではミンミンゼミ、ヒグラシ、アブラゼミが鳴きつづける。また、ノリウツギの花のころには、アオバセセリ、キバネセセリ、アサギマダラも活発に活動する。これらの昆虫が、春から秋にかけて自然を舞台に舞うさまはすばらしい。

トンボの類では、化石動物といわれるムカシントンボを皿ヶ嶺で見かけることがある。更に、ウスバカゲロウ、カワトンボ、ハラビロトンボ、シオカラトンボ、シオヤトンボ、コシアキトンボ、美しいミヤマアカネ、

シヨウジョウトンボ、なわばり根性の強いギンヤンマのほか、コオニヤンマ、オニヤンマ、ミルヤンマなどが全域にわたって生息している。
ハチのなかまでは、ミツバチ、スズメバチ、アシナガバチ、マルハナバチ、ジガバチ、クリタマバチ、アオムシコマユバチなどが生息している。

近年、目だつて減つたとはいえ、各河川の清流にはゲンジボタル、ヘイケボタルなどの幼虫が、カワニナなどをたべて生育し、その成虫は初夏の夜、青白い光を放つて群飛する。

また、九月にはいるとそこかしこの草原で、マツムシ、スズムシ、クツムシ、キリギリス、エンマコオロギ、ミカドコオロギなどが、夕方から夜半にかけて美しい声で鳴きつづける。ハエの類ではニクバエ、シヨウジョウバエ、イエバエ、キンバエなどが生息しており、カでは、アカイエカ、キナハマダラカ、ヒトスジシマカ、トウゴウヤブカなどがある。

3 鳥 類

近年、野鳥の数は減つてきているものの、皿ヶ嶺をふくむ町全域の野山には、まだまだ相当数の野鳥が生息している。人里近い雑木林では、カワラヒワや、ホホジロを、田畑では、スズメの群れをみることもできる。

新緑のころ谷間を訪れると、さわやかなウグイスの声を聞くことができるし、秋になるとヒヨドリ姿も見え、また、山腹にさしかかると、エナガやメジロの声も聞こえてくる。

皿ヶ嶺、桂ヶ森などの尾根付近の林には、ジュウイチ、キビタキ、ヤ

ブサメ、コガラ、センダイムシクイ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、トラツグミ、カケス、ツツドリ、アオゲラなど、多くの鳥がすんでいる。また、山奥の溪流近くでは、ミソサザイなどの美しいさえずりを耳にすることもできる。

そのほか、キジバトやアオバトも見られる。
オオルリ、ヤマガラ、フクロウ、セグロセキレイ、キセキレイを見かけることもある。

トビ、カラスのほか、モズ、キジ、ヤマドリなども生息している。
川づたいでは、シヨウビン、カワセミ、カワガラスも見られる。
渡り鳥として、夏鳥のツバメ、ホトトギス、冬鳥にはマガモ、ツグミがいる。

4 その他

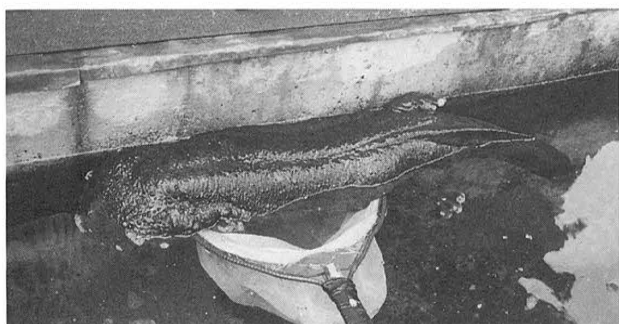
多足類では、皿ヶ嶺にすむメクラグモのほか、ジョロウグモ、丸網の巣をつくるオニグモ、コガネグモ、低木に生息するクサグモ、主に屋内にすむタナグモ、オオヒメグモ、地中と石垣、家の土台の下などに管状の巣をつくるジグモ、水面にすむミズグモ、放浪性のハエトリグモ、アシナガグモなど、巣を見るだけでも面白いクモがいたるところにいる。

また、皿ヶ嶺には、ニホシタテヅメザトウムシ、サラアゴザトウムシ、サラビヤスデ、オカサラヤスデなどが生息していることが知られている。なお、ゲジ、トビズムカデ、アカズムカデ、ツチムカデなども見られる。

甲殻・貝類では、カニ、エビのほか、まれには、ツガニも見られる。
池や水田では、タニシを、川ではカワニナを見ることができ、二枚貝では、その数は少ないが、シジミが池や小川にすんでいる。陸産の貝で

は、ヤマタニシ、クルマガイ、ヤマキサゴ、ゴマガイ、キセルモドキ、ベッコウマイマイが生息している。

哺乳類では、イノシシ、タヌキ、キツネなどがある。特にイノシシは、一〇〇キ哆を超える巨体のものもある。神社・仏閣の老木には、ムササビがすみついているし、洞穴とか廃坑にはコウモリがおり、谷川ぞいの岩陰や石垣の穴などには、肉食性のテン、イタチがいる。また数は少ないがアナグマもいる。ハクビシンはもとも肉食性であるが、最近、人家近くへ出て、農作物を荒している。山野に食物が少ないためではないかと思われる。スギ、ヒノキなどの幼齢木に大被害をもたらすノネズミ、



オオサンショウウオ

ノウサギ、人家やその周辺には、ドブネズミ、ハツカネズミ、ダイコクネズミ、田畑にはモグラも多数生息している。

ハチュウ類では、マムシ、シマヘビ、ヤマカガシ、ヒミズなどがたくさんいるほか、人家の近くには、アオダイショウがいて、ときには、ネズミを追って屋根裏まで入ることがある。皿ヶ嶺には、タカチホヘビという小形のヘビがいて、マムシの好餌になっていることが知られている。

また、トカゲ、カナヘビのほか、

池や沼地には、イシガメも少ない。

魚類では、二名、畑野川、直瀬の奥の溪流には、アメノウオ(アマゴ・ビワマスの陸封型)が多い。また、ハヤ(カワムツ)、ドンコ、モツゴ(アブラハヤ)、ショウハチ(オイカワ)、イダ(ウグイ)、カジカ、ドジョウ、ウナギなどは、ほとんど全域の河川にいる。なお、放流による、フナ、コイ、ニジマスが生息しているほか、昭和三三年ころから、アユの放流も行われるようになった。

両棲類では、直瀬、畑野川、二名、皿木の奥には、ハコネサンショウウオが生息している。これらのサンショウウオは、繁殖期には谷川へ出るが、そのほかは、主に陸上生活で、比較的湿気が多い湿原とか朽木、岩石の下などにすんでいる。イモリ、ヒキガエル、トノサマガエル、アマガエル、アカガエル、ツチガエルも多い。また、各河川の清流の岩には、美しい声をもつかじかかカエルも多い。